

6. 大山ジャンプ台

<三代のジャンプ台>

- ・ 豪円地蔵が祀られている豪円山の南側斜面にコンクリートでできた立派なジャンプ台がある。西日本には、大山にしかないジャンプ台である。平成5年に行われた二回目の大山国体で、あのオリンピック金メダリストの船木和喜が飛んだジャンプ台である。
- ・ このジャンプ台は、大山における三代目のジャンプ台となる。

<兜山学が飛んだジャンプ台>

- ・ 現在のジャンプ台の南側、豪円地蔵へと続く道の少し下に、土が盛り上がったところがある。これが初代のジャンプ台である。
- ・ 大山の生んだ名スキー選手の一人である兜山学氏夫人の富子氏の話によると。

☑ 伝承者 兜山富子氏：

- ✓ ご主人はジャンプが得意であったといていた。
- ✓ 古い豪円山ジャンプ台で39m飛んだのだと自慢げに話していた。

- ・ 39mといえばほとんど平らなところに着地したことになる。当時、ジャンプのスキーなども揃っていなかった時代にそれだけの距離を飛ぶには、相当の技術と度胸があったのであろう。今の大山にも、その痕跡がしっかりと残っている。

<笠谷幸生が飛んだジャンプ台>

- ・ 昭和47年大山ではじめて行われた国体のために作られたのが二代目のジャンプ台である。現在のジャンプ台の少し南側であったらうか、鉄筋で弧を描くようにランディングバーン(着地点)が作られていた。今のジャンプ台より一回り大きかったように記憶している。このジャンプ台は、札幌オリンピック金メダリストの笠谷幸生さんが飛んだことでも知られている。
- ・ 札幌オリンピックは、昭和47年2月3日から行われ、ジャンプ競技では、1位笠谷、2位金野、3位青地と日本人選手が表彰台を独占して日本中がわき上がった。
- ・ その直後、昭和47年2月20日から大山国体が開催された

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ ちょうど札幌オリンピックの直後の開催であった。
- ✓ オリンピックの金メダリストが来るとあってみんな注目をしていた。

☑ 伝承者 大山町誌：

- ✓ 最終日、札幌オリンピック金メダリストのジャンプを見ようと、四千人の観衆が集まった。159番の笠谷は期待通り見事なジャンプで優勝。観衆の期待に応えた。

- ・ 当時の状況が目につかぶようである。その後、使われることなく、長い間放置されていたことを覚えている。ランディングバーンの板がはぐれ痛々しい感じであった。

< 船木和喜が飛んだジャンプ台 >

- ・ 大山は冬季国体の開催できる日本の南限といわれている。広島県北部にも多くのスキー場はあるがジャンプ台がない。平成 5 年の国体に合わせて作られたこのジャンプ台は、総工費 673 百万円といわれている。当時高校生であった長野オリンピック金メダリストの船木和喜選手もこのジャンプ台を飛んだという。
 - ・ このジャンプ台も国体以降、一度も使われていない。
- ☑ 伝承者 木田達二氏：
- ✓ せっかく作ったジャンプ台なので有効に使う方法を考えたい。
 - ✓ ジャンプ台の隣に付いていたリフトがなくなったのは残念だ。ジャンプ選手も今やスキーを担いであがる時代ではない。
- ・ ここまでお金をかけて作ったジャンプ台を国体のためにだけ使ったのではもったいない。今、各地でサマージャンプ大会なども開催されている。グリーンシーズンの活性化が課題となっている大山にとって、一つの起爆剤になるかもしれない。

= 大山の観光開発 =

< 大山王国 >

- ・ 現在、大山を含めた鳥取県西部地区の活性化を図るための活動が様々な形で展開されている。その中でも草分け的な存在が大山王国ではないだろうか。
 - ・ 大山王国の設立から携わり、現在運営の主体となって活躍している石村氏によると。
 - 伝承者 石村隆男氏：
 - ✓ 大山山麓の市町村が集まって地域の観光資源開発を検討していた。
 - ✓ バブルがはじけてハード面でも事業ではなく、ソフト面での事業が見直されている頃であった。以前から暖めていた構想が取り上げられ、その後の大山王国の活動へとつながっていった。
 - ・ 石村氏は、大手旅行会社で海外旅行の企画担当を長く勤めたという。仕事柄多くの国へ旅行することがあり、30 カ国以上の国に行った経験を持っている。海外旅行にでると日本の良さ、そして米子の良さがよく分かるという。
 - ・ 32 歳の時に米子市の研修制度を利用してアメリカのコネル大学で観光ビジネスを学んだ。成果をまとめ観光活性化についての企画書を作り、機会を待っていたという。
 - ・ 彼の企画は、生きた情報をお客様に届けること、そして一度来てくれた人がリピーターとして、もう一度来てくれるような仕組みを作ることが目的である。
 - ・ HP やガイドブックを利用して、常に新しい情報を提供し、また来たくなるような期待感を与えることを目指している。
- ☑ 伝承者 石村隆男氏：
- ✓ 市町村という単位ではなく、もう少し広い視点から観光を考える必要がある。
 - ✓ 地域で同じ方向を向いて観光振興をすることが重要である。残念ながら現在は、松江・玉造は東京などの関東圏、大山・皆生温泉は関西圏、日野は米子などからのお客様を呼ぶことを考えており、ターゲットがバラバラである。

- ・ 島根県では、元宮岡松江市長や元岩国出雲市長など強いリーダーシップを持った指導者を中心として戦略のある観光開発を行っている。これからの観光振興は、大きなベクトルに向けてみんなが力を合わせて取り組むことが重要である。
- ・ 石村氏は、現在の地域観光の課題として次のように語る。
- ☑ 伝承者 石村隆男氏：
 - ✓ 観光を総合的に運営する母体がない。プログラム作りから運営に至るまで一貫して取り組む。誰かがやらなければ取り残されてしまう。
- ・ これからの夢として
 - ✓ 完全無欠のインフォメーションセンターを米子に作る。米子ためだけではなく、山陰全体の情報を発信する。いわば、観光情報提供のハブ機能を果たしていきたい。
- ・ 米子は、古くから交通が発達しており、文字通り山陰の玄関口である。
- ・ よく通過地点といわれるが、通過地点ということはとりあえず人が通っているのである。
- ・ そのお客様をいかに取り込んでいくのが今後の課題である。
- ・ 交通の要所というだけでなく、情報の要所にするにより、山陰に来るときは一度米子によって行くというような状況ができれば、この地域の観光振興にとって大きな一歩となる。

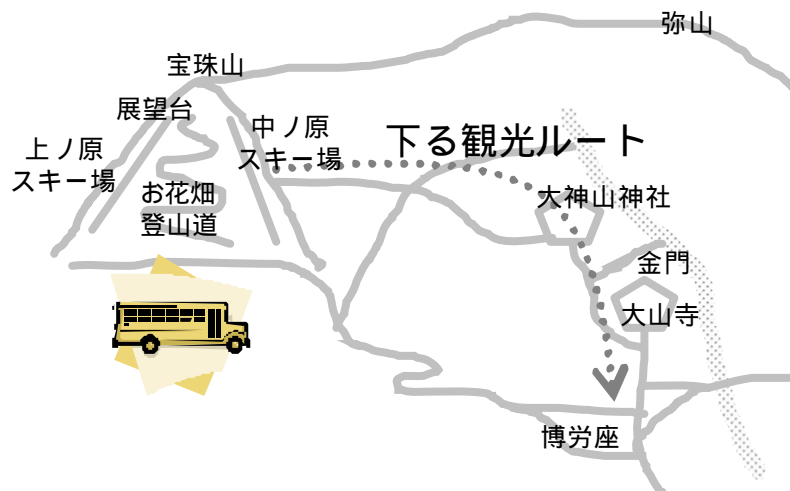
<スポーツのメッカ大山>

- ・ 夏になると大山寺周辺には、関西方面から多くの学生がスポーツの合宿に訪れている。都会から離れ過ごしやすい環境の中で、心と体を鍛えているのであろう。
- ・ 長野県に菅平高原という所がある。冬はスキー場として多くのスキー客で賑わうが、夏場になるとその様相を一変させスポーツ合宿のメッカとなる。大学ラグビーの合宿地として有名であるが、そのほかにもサッカー、テニスなど様々なスポーツの合宿が行われている。環境的には、大山も菅平に引けを取らないだけのロケーションにある。
- ・ しかし、大山のイメージはまだまだスキー場の方が強い。このイメージを変えていくことも重要な観光振興ではないだろうか。
- ・ また、利用者の立場に立って利用しやすい状況を作ることも重要である。大山周辺には、多くのスポーツ施設がある。しかし、行政の単位が違うため利用するためには各々違った手続きを必要とする。利用する側としたら、このような手続きや情報を一元的に扱える場所があれば非常に便利である。
- ・ このような、利用する側の視点に立った施策も必要であろう。

<登る観光から降りる観光へ>

- ・ 大山寺の観光の目玉は、千数百年続くという信仰の証である寺社である。大山寺のバス停から大山寺本堂までは上り坂の参道が約 500m 続く。
- ・ そして大神山神社奥の院には、大山寺からまた約 500m の日本一長いといわれる石畳の参道を登って行かなくてはならない。

- ☑ 伝承者 足立修氏：
 - ✓ 現在、大山寺に観光で訪れる方の多くが高齢者である。
 - ✓ 大山寺本堂までは何とかあがるが、ほとんどがそこで引き返してしまう。
- ・ 伝承者杉本氏がビルマに旅行したときの話として。
- ☑ 伝承者 杉本良巳氏：
 - ✓ ビルマには、バコタという仏塔がある。昔は、大変な思いをして登っていたが、今ではエスカレータが付いている。地元の人に聞くと今まで観光客が登るのを断念していたが、お参りするようになったという。
 - ✓ とにかく早くやらなければならない。今やらないと手遅れになってしまうと語る。
- ・ 現在、日本の観光市場を支えているのは高齢者層である。団塊の世代が退職の時期を迎えるとその傾向はますます強まることが予想される。
- ・ このような状況に、大山も積極的に取り組んでいくことが必要である。
- ☑ 伝承者 足立修氏：
 - ✓ 大山寺の観光資源は、山とお寺と神社である。その観光資源を満喫できる仕組みづくりが必要である。中高年の観光客が多い長距離を歩く今までの観光コースは受け入れられない。そこで大山寺を上から下る観光ルートを実現したい。
 - ✓ 中ノ原スキー場のリフトをグリーンシーズンも動かし、まず雄大な大山を宝珠山頂の展望台で見てもらおう。スキー場に登山道を整備して高山植物の花畑を作る。
 - ✓ スキー場から大神山神社への散策路を整備すれば「下る観光ルートの出来上がり！」である。
- ・ 夢のような話ではあるが、実現不可能な話ではない。お客様が求めているのであれば、実現に向けて努力していく必要がある。



- ・ 最後に大山寺の将来像を大神山神社の宮司である会見氏に聞いてみた。
- ☑ 伝承者 相見佳之氏：
 - ✓ 観光客は減っているが、信仰の人（大山の信仰）は減っていない。
 - ✓ 信仰のためにお参りする人をもっと大切に！
 - ✓ 観光客は一度来ると次は何年も先、信仰の人は毎月でも参る方がいる。

 - ✓ 信仰をする人たちが少しでも増えていけばもっと違う。
 - ✓ 信仰を忘れて、観光にだけ目を向けていては大山の将来も暗い。

- ・ 大山寺の成り立ちを考えると納得のいく話である。もともと大山は、航海の道しるべとして、清らかな水の恵みの源として、そして天変地異から守ってくれる“母なる山”として大切にされていた。その山が信仰の対象となり、地元をはじめ中国地方各地から信仰を集めてきたのである。
- ・ 大山に人が集まり観光地となったのもとはといえば、その信仰心があったからこそである。そのような大山観光の成り立ちをもう一度理解した上で大山観光のあり方をもう一度見直していく必要があるような気がする。